8 月 22 日のメッセージ

聖書：ローマの信徒への手紙　8：　18－25

「忍耐して待ち望む」

「人生 100 年時代」と言われるようになりましたが、それでも 100 年です。200 年、300 年と生きられるわけではありません。人間はどれほど長生きしたいと願っても、それほど長い時間を生きられるわけではありません(「人生の年月は七十年程のものです。健やかな人が八十年を数えても／得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。」詩編 90:10)。

そして、人生の多くの時は苦労の連続のように思えます。努力しても、苦労しても、なかなか花は咲かず、実を結びません(「いちじくの木に花は咲かず／ぶどうの枝は実をつけず／オリーブは収穫の期待を裏切り／田畑は食物を生ぜず／羊はおりから断たれ／牛舎には牛がいなくなる。」ハバクク書 3:17)。また、せっかく良いことをし続けたとしても、足下を掬われることもあります(「人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。」マタイによる福音書 13:25)。

そのような中にあって、私たちを支えるものは何か。それは、たとえ現実がどれほど厳しくとも、私たちには希望があるという約束です(「被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。」ローマの信徒への手紙 8:20)。

2000 年前から、私たちはこの希望の下で生きてきました。残念ながら、この希望は目には見えません(「わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。」ローマの信徒への手紙 8:24)。見えるものはわかりやすくて良いのですが、その多くは自分にとって都合の良いものだけになってしまうでしょう。目には見えませんが、「神の恵みは私たちに十分である」という事実が私たちを支えています。焦って何かをしようとすると、かえって自分から墓穴を掘ることもあります(「主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。』」マタイによる福音書 13:29)。だから、私たちは忍耐しつつ待つのです(「刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、『まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい』と、刈り取る者に言いつけよう。」マタイによる福音書 13:30)。

しかしこの忍耐は、一人ひとりの「頑張り」ではありません。人間の「頑張り」には限界があります。忍耐できるのは、神の視点、永遠の視点から世界を見ることによってです。神の世界は必ず実現するという希望によって私たちは待つことができます。

神の言葉が真実であること、神の約束が確かであること、神の恵みが十分であることを受け止め、時が満ちるのを待つ(「わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」ローマの信徒への手紙 8:25)。その日は必ず来ると信じて、生涯の日を数えつつ待つだけです(「生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることができますように。」詩編 90:12)。

耐えるだけではなく、未来を夢見て、今を共に生き抜こうではありませんか。